

三瓶山の火山灰で埋もれた縄文遺跡

板屋Ⅲ遺跡（飯南町）、調査年：1994～96（平成6～8）年

角田徳幸

三瓶山は、『出雲国風土記』では「佐比売山^{さひめやま}」として登場します。くにびき神話によれば、「佐比売山^{さひめやま}」は、「火神岳^{ひのかみだけ}」（大山）とともに、引き寄せた国をつなぎ止めた杭であったとされています。西の原から望むその穏やかな姿は、神話の舞台にふさわしいものといえるでしょう。一方、三瓶山は、10万年前から噴火を繰り返した火山です。縄文時代には、流れ下った火砕流や、降り積もった火山灰によって、山麓は草木も生えない荒野となっていた時期があったようです。高さ10mを超えるスギ林が立ったまま残ることで知られる天然記念物 三瓶小豆原埋没林は、4,000年前の活動で起こった山体の斜面崩壊などで埋まったものです。縄文人が見た三瓶山は、今とは全く異なる姿をしていました。

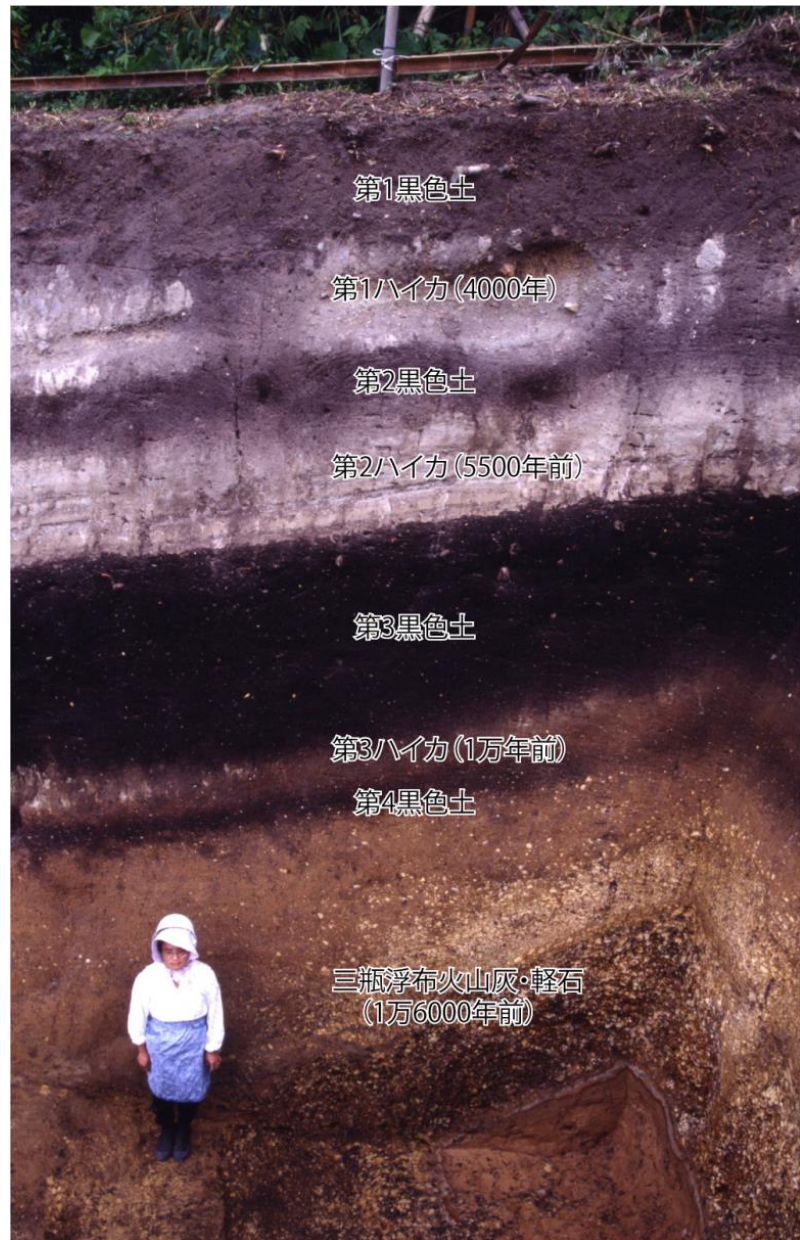
1994年、板屋Ⅲ遺跡の発掘を担当した私は、地元で「ハイカ」と呼ばれる火山灰の上で住居跡を調査中でした。柱を立てた痕跡である柱穴を深く掘り下げていくと、火山灰層の下にある黒色土に達します。黒色土まで掘ると、柱穴の深さがわからなくなるのが悩みでしたが、掘り上げた土に縄文土器が混じっているのに気づきました。発掘に入る前、「火山灰より下に遺跡はない」と聞いていたのですが、この土器で火山灰に埋もれた遺跡があることを確信しました。住居跡の調査を終え、火山灰の下の黒色土を掘り下げていくと、縄文土器や石器、炉跡などが次々に出てきます。火山灰と縄文時代遺跡の関係をさぐる糸口をつかむことができました。

三瓶山は、縄文時代、今から10,000年前、5,500年前、4,000年前の3回噴火しました。活動の休止期には、植物の繁茂などにより黒色土が形成されており、地層をみると火山灰と黒色土が幾重にも重なっています。そこで、調査区を上から順に掘り下げ、黒色土に遺物が含まれていないか検討しました。その結果、4層ある黒色土のすべてから、土器

や石器が出土し、縄文人のムラが 10,000 年近く前からあったことが明らかになりました。

三瓶山麓では、小豆原埋没林よりずっと以前から、縄文人がたくましく暮らしていたのです。

(島根県古代文化センター長)



板屋Ⅲ遺跡の土層

縄文時代に噴出した三瓶山の火山灰や火砕流が白くみえます。下層の三瓶^{うきぬの}浮布火山灰・軽石は大噴火によるもので、近畿地方南部でも確認されています。